断章
旭川のアイヌ語地名研究 ⑰
高橋 基

―旭川のカムイコタン㉔―

前回、天塩川のテシ（tes 岩梁）を見たが、文化四年（一八〇七）に、近藤重蔵は、天塩川のテシは、「鬼」が魚を上らせないようにするため作ったが、「判官（源義経）」が来て、それを毀した…と、文化期には、天塩川には、義経伝説があったという貴重な記録を残した（音威子府村の咲来の天塩川には、「一本松」の義経伝説もある―『音威子府村史』）。

安政四年（一八五七年）に松浦武四郎は、近藤が「鬼」と書いたのを、旭川と同じ「鬼神（nitnekamuy）」と具体的にし、明治十三年生まれの名寄地域の伝承者の北風磯吉翁は、「魔神」が作ったテシを毀したのは、「文化神のサマイクルカムイ」（更科源蔵『アイヌ伝説集』）であったと伝えた。

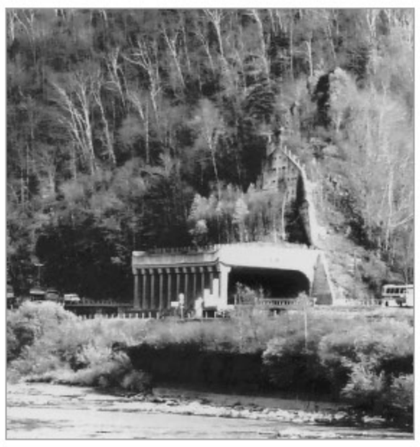
このように、テシに関しての伝説を見ると、アイヌ時代の往時、石狩川上流と天塩川上流には、密接な交流があったことを物語っている。

天塩川の伝説は、テシ伝説以上に進展しないのであるが、旭川のカムイコタンでは、ニッネカムイが、サマイクルに首をはねられるところまで発展する。

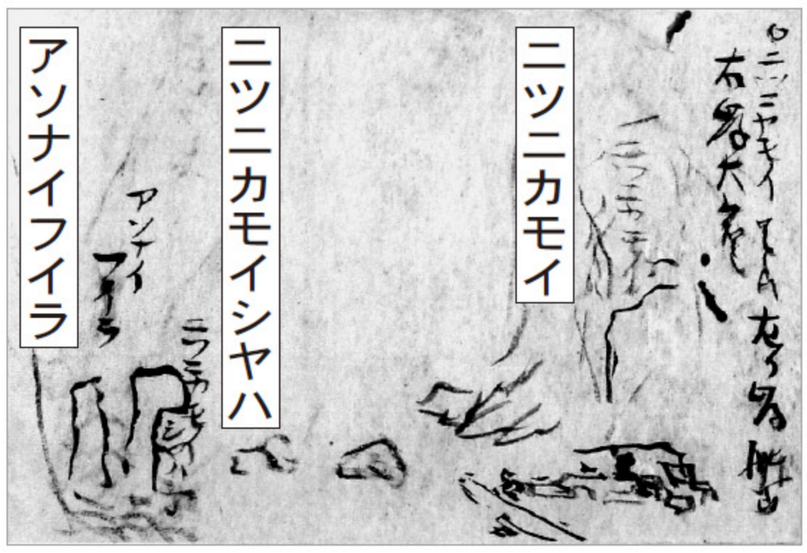
当連載⑮では、昭和三十五年の知里真志保の地名解で紹介したが、今回は最も古い松浦武四郎の記録で、安政期の伝説の地を見ていきたい。

まず、掲載図の右岸⑤には、神に切られた、「**鬼の首**」の岩がある。松浦武四郎は幕府への報文日誌の「再篙石狩日誌」で次のように書いている。

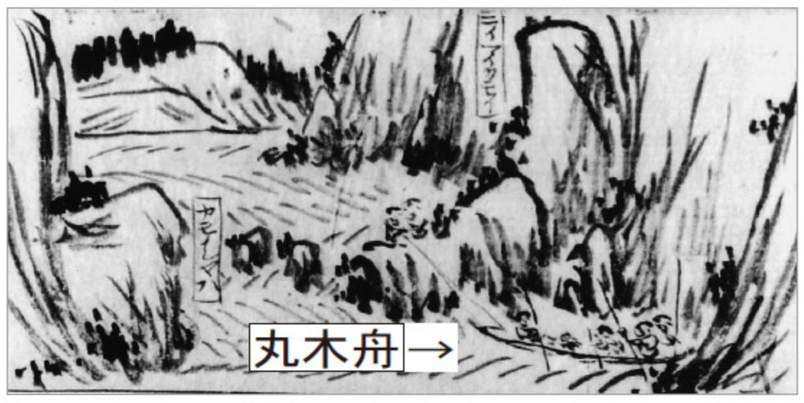
「ニイツイカモイ―左（註・上流に向かって左＝右岸）の方、岸に、高さ二丈計（約六㍍程）の人の首の如き岩有。是を**鬼の首**なりと云ふ。アイヌ等此前へ木幣を削て奉る。ニイツイと云ふは鬼の事也。カモイは神也。昔、鬼此処まで上り神と合戦をして、神に負けて切られし首なりと申し伝えたり。此辺り腕のまたは股のと申すさまざまの岩有。」


（2）鬼の躰

（1）鬼の首



（3）『巳第二番』



（4）「再篙石狩日誌」

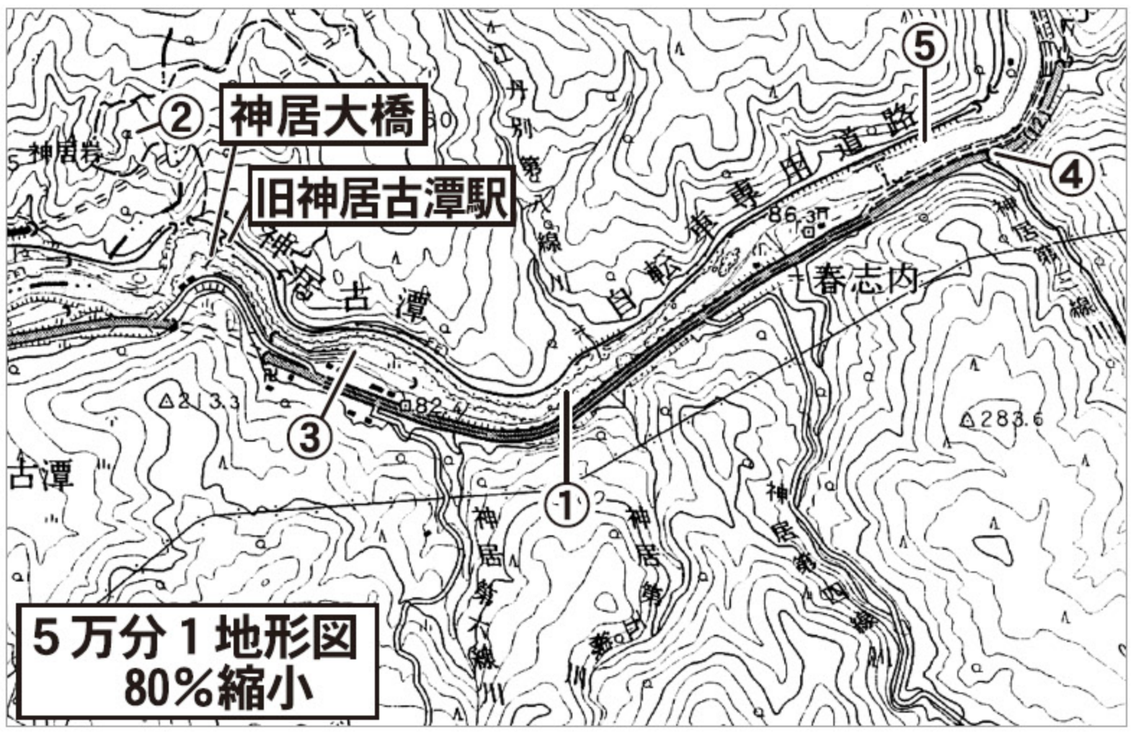
写真(3)は、松浦武四郎がこの調査に持参した野帳（フィールドノート）『巳第二番』のスケッチで、左に見える「ニツニカモイシヤハ（nitnekamuy-sapa 鬼の・頭）」が「**鬼の首**」で、特徴が酷似している。写真(1)は、その現在の姿で、大きさがわかるように筆者も前に座って写したもの。武四郎のスケッチと比較すると、「**鬼の首**」の下部が土砂で埋まっている。安政期の石狩川を知る重要な手がかりである。

写真(2)が、掲載図④の左岸の「**鬼の躰**」である。国道二二号線の拡張工事で、「**鬼の躰**」の大岩が破壊されるところを、「ニッネカムイ覆道」を作り、アイヌ伝説の岩が漸く保存されたもの。

写真(4)は、「再篙石狩日誌」の添え画で、(3)の野帳のスケッチを元に描いたもの。松浦武四郎の直筆である。「**鬼の躰**」については、武四郎は右の日誌で、次のように記述している。

「カモイ子トバケ（nitnekamuy-netopake **鬼の・躰**）―山岸に高さ七八丈（約二十一、二十四㍍）の大岩一ツ有。是はニイツイカモイの躰の由也。子トバケは身と云事。此処も急流なるが故に、両人は岩の上え乗り、四人にて棹さし引き上る也。」

写真(4)の下に「丸木舟」と記した所は、「**鬼の躰**」の下流の激流を、アイヌの人たちが、苦労して上流へ向かう様子を、松浦武四郎は――線部の通り忠実に絵に描いている。本文と合わせて、往時のカムイコタンに思いを馳せていただきたい。（アイヌ語地名研究会幹事）



※毎月第1週号に掲載します